

## 星野道夫のスピリチュアリティ

—文学作品から日本人の志向するスピリチュアリティの一形態と、その多様性を考える試み—

濁川 孝志 立教大学コミュニティ福祉学部\*  
遠藤伸太郎 立教大学コミュニティ福祉学研究科  
和 秀俊 立教大学コミュニティ福祉学部

Understanding one of the Japanese views of spirituality and variety of spirituality through the writings of Michio Hoshino

NIGORIKAWA Takashi · ENDO Shintaro · KANO Hidetoshi

### 1. スピリチュアリティの出現

#### 1) スピリチュアリティという用語の出現

近年スピリチュアリティという用語が、我が国の医療現場、看護現場、あるいは心理学の研究分野を中心にしばしば使用されるようになってきた(安藤, 2007)。そして、スピリチュアリティやスピリチュアルという言葉は、今や上記のような特殊な場面に限らず、一般社会における日常会話の中にも浸透しつつあるように思われる(磯村, 2007)。安藤(2007)はこれらの状況を概観し、終末期医療の分野で「スピリチュアルケア」という概念が欠かせないテーマになっていること、精神医学分野で診断マニュアルのDSM-IVに“religious or spiritual problem”という項目が設けられたこと、更に心理学の分野では心理療法との関連でスピリチュアリティという概念が注目されてきた事実を指摘し、その上で、この現象は従来明確な意味規定が薄かったスピリチュアリティという概念が、現代社会に生まれた新たな状況に対応するために必要なものと考えられた結果、出現し

たとしている。さらにスピリチュアリティは、現代という時代がそれを言い表す必要性をもったことから浮上した言葉であり、現代人の心に密かに増殖してきた無意識的な欲求を言い表すものであると指摘している。

そもそもスピリチュアリティという言葉は、誰がいつ頃使い出したのか。安藤(2007)によれば、spiritualityという英語は中世ヨーロッパにおいて、ラテン語の名詞spiritusあるいは形容詞spiritualitasを起源に発生し、そもそも「息」ないし「風」を意味していた。しかし当時のこの言葉の使用は、ほぼ宗教者のみに限られていたらしい。では現代社会においては、誰が最初にスピリチュアリティという言葉を初めに使い出したのか。湯浅(2005)によれば、1960年代にアメリカで起こった対抗文化、すなわち既存の価値観に異議を唱える文化運動と呼び、この時期にアメリカ全土に広まった東洋起源の瞑想法や身体技法の実践家、そして同時期の臨床心理学者がこの言葉を最初に使い出したという。つまり彼らは、禅やヨーガの瞑想体験はスピリチュアルな性質の体験である、と解釈したわけである。その後ニューサイエンスの時代などを経て、東洋思想と現代物理学の対比への関心、マスメディアにおける超能力の紹介、気や伝統中国医学への関心の高まりなどという社会現象の出現と呼び、今一つ掴み所のないスピ

\* 〒352-8558 埼玉県新座市北野1-2-26  
立教大学コミュニティ福祉学部

リチュアリティという言葉は徐々に大衆の中に浸透して行った。そして、2000年のWHOの執行理事会において、健康に関わる要素として“スピリチュアリティ”の重要性が議論されたことにより、スピリチュアリティという用語はある種の市民権を得たように思われる。

## 2) スピリチュアリティの定義

スピリチュアリティの意味や定義に関しては、これまで多くの研究者によって議論されてきた。しかし、これまでに統一された見解が得られたとは言い難い。それらの諸説は、定義する研究者の背景、つまりは国籍、文化的背景、歴史的背景、学問的背景など様々な要因の影響を受け、それぞれ異なるものになっている。

WHO（世界保健機関）は、健康との関連性からスピリチュアリティを以下のように定義した（中嶋、2001）。

スピリチュアルとは、人間として生きることに関連した経験的一側面であり、身体感覚的な現象を超越して得た体験を表す言葉である。多くの人にとって“生きていること”が持つスピリチュアルな側面には宗教的な因子が含まれるが、スピリチュアルとは、宗教的と同義ではない。スピリチュアリティは、人間の生の全体像を構成する一因子とみることができ、生きている意味や目的に関わる。特に人生の終末に近づいた人にとっては、自らを許すこと、他人との和解、価値観の確認などと関連することが多い。

このWHOの解釈では、スピリチュアリティとは、生きている意味や目的に関わるもので、「生きがい感」や「価値観」と関連する概念となっている。

安藤（2007）は、これまでに様々な分野の研

究者によって定義されてきたスピリチュアリティの意味を再検討し、総合的に考察した結果、以下のような定義を導いている。

「スピリチュアリティとは、人間に本来備わった生の意味や目的を求める無意識的欲求やその自覚を言い表す言葉である」

そして、しばしば対比される宗教との関係からこの言葉の意味を考えれば、安藤の言うように、「スピリチュアリティとは、従来から使われてきた「宗教」という言葉から、その組織や制度としての側面を排したものであり、（安藤、2007）葛西の言うように、「スピリチュアリティは、宗教のもつ拘束的、排他的、教条的な部分を取り除いた包摂的なイメージを持つ言葉であり、かつ宗教の本質、あるいは宗教において普遍的なものを担っているもの」と考えられる（葛西、2003）。

## 3) スピリチュアリティと自然

一方、スピリチュアリティの構成概念として「自然」という言葉、あるいは自然と関連する概念が頻繁に挙げられる（濁川、2009）。ここでは、本論のテーマの中心である星野道夫が広大なアラスカの自然の中で活動したことも念頭に、スピリチュアリティと自然との関連性について考えてみたい。

スピリチュアリティの定義には、「自然」というタームを含むものが複数みられる。Elkins, D. N., Hedstrom, L. J., Leaf, J. A., & Saunders, C. (1988) は、人間性心理学の観点からスピリチュアリティを以下のように定義している。

ラテン語でSpiritus（いのちの息吹き）を意味するスピリチュアリティとは、超越的な次元への自覚を通じて生じ、自己、他者、自然、人生、そして究極のものとして考えられるあらゆる事に関して同定可能な価値

によって特徴づけられる存在と経験の様態である。

中村（2005）によれば、このスピリチュアリティの定義は、「現代心理学で、主として西洋の思想、文化のフィルターを経て認められている要素を表したものである」ということである。また、Cloninger, C. R., Svrakic, D. M., Przybeck, T. R. (1993) は、スピリチュアリティを、「全体としての自然、あるいはその源泉と自己を同一視するように導く、不死であろうとするわれわれの内的な切望である」と定義している。

日本の研究者によるスピリチュアリティの議論の中にも、自然スピリチュアリティとの関係性を示唆するものが数多くみられる。例えば、日本人のスピリチュアリティを論ずるうえでしばしば引用される鈴木大拙の『日本の靈性』（鈴木、1972）では、日本人の靈性の感得過程には、内部と外部の二元性を強く意識せず、森羅万象が同じ一つのいのち、生命、生命力という源泉から発し、それらが尽きることなく流れるという一元論的観念があるとされている。この発想は、「森羅万象を同じ一つの命」と考えており、地球全体を一つの生命体と考えたジェームズ・ラブロックの「ガイア仮説」に相通ずるものがある。また精神科医の加藤（1996）は、アルネ・ネスのディープ・エコロジーの発想を用い、人間と他のすべてのものが平等に補い合い、助け合って生きていくという「万有との深い出会い（deep ecological encounter）こそが、靈性の感覚である。」としており、スピリチュアリティと生命中心主義的発想の結びつきを示唆している。これは同時に、スピリチュアリティが自然の重要性を認識する上で必要な価値観であることを示すものである。

西平（2007）は、内外におけるスピリチュアリティというタームの様々な解釈を概観し、スピリチュアリティの理解のしかたには、以下の

4つの位相があることを示した。それらは、すなわち、1）「宗教的」（従来、宗教が担当してきた領域）という理解、2）「全人的」、あるいは「ホリスティック」という理解、3）「実存的」に相当する理解、4）「絶対的な受動性（まかせる・ゆだねる）」に相当する理解などである。このうち「絶対的な受動性」の位相に関して西平は、『何か聖なるものに触れて「生かされている」と実感することであり、そうした中で、自分という個人の区切りがなくなり、自然との深いつながりの中に溶け込むような一体感が生じること』、と説明している。この種の体験は、まさに「個」を超えた自分の発見であり、その意味でトランスパーソナルな体験といえることができる。また西平は、「キリスト教のような一神教的な立場では、この受動性は、神からの働きかけに対する受動作用であるが、これが唯一神の世界観から離れた文脈では、自然や地球との一体感として使われる」とした。そして、「自然は生きている。地球も生きている。そうした“いのちの流れ”と直接的に出会うのは、外受容感覚としての皮膚ではなく、最も内面のスピリチュアリティであり、内面性の底が、そのまますべての自然の中に、宇宙の中に開かれている」と、この位相の理解について説明している。

田崎美弥子・松田正己・中根允文（2001）はWHOの健康概念に関する改訂の動きに応じた国際比較調査の一環として、日本におけるスピリチュアリティ観の検討を行った。それによれば、日本人のスピリチュアリティ観には個人差が大きいものの、共通項としては「自然との対比における人の小ささ」、「自然への畏敬の念」、「祖先との関わり」、「個人の内的強さ」、「特定の宗教を持たないにしても、何か絶対的な力の存在を感じる」となどの項目が挙げられ、ここでも「自然への畏敬」「自然との対比における人の小ささ」など、スピリチュアリティと自然との関係性がみてとれる。

中村（2005）は日本人におけるスピリチュアリティ測定尺度の検討を行い、その中でチュアリティ概念を構成する因子として、「生の意味と目的」「霊性の自覚」「命の永続性」「自然との一体感」「無償の愛」「個人性」「自我固執」の7項目を抽出し、このうち「個人性」と「自我固執」の2項目は、スピリチュアリティと反対の側面を表現していることを示した。さらに中村はこのデータを共分散構造分析によって解析したところ、スピリチュアリティの構成要素として、「生の意味と目的」がもっともパス係数が高く、以下「霊性の自覚」、「命の永続性」、「自然との一体感」までが説明力の高い観測変数であることを明らかにした。そして、「霊性の自覚」と関連する観測変数には、「命の永続性」と「自然との一体感」があり、これら3つの側面は相関していることが認められたと報告している。ここで中村の示した、「霊性の自覚」と「自然との一体感」が相関するというのは、スピリチュアリティと自然に対するある種の感性が互いに関連性を持つという実に興味深い知見である。このように洋の東西を問わず、スピリチュアリティはその一面として、「自然」との関係の中で捉えられてきた歴史がある。

ところでここで、自然の概念と星野道夫の自然観に関して少し整理しておきたい。もともと日本語には、現在使用しているような意味での「自然」、つまり「人間」や「人工」との対立概念としての「自然」という言葉はなかった。そして、そのような概念も存在しなかった。自然に関わる言葉には、「自然な」「自然だ」（＝おのずからなる＝自然＝じねん）といった形容詞や形容動詞的な使い方しかなかったのであるが、明治期にヨーロッパから「nature」というコトバが輸入され、その訳語として「自然」が使われるようになった。なぜ「自然」が訳語に当てられたかについては様々な説があるが、どれも定説には至っていない。確かに言えること

は、日本人は近代以前には「nature」に当たる言葉を持っておらず、西洋のような客観的対象物としての自然観というものが無かったということである（深谷・榊田、2006）。西洋的自然観、いわゆる“nature”のルーツを辿ると、ギリシャ語の“physis”に辿り着く。しかし、ここでの自然とは人間と対峙するような存在では無く、むしろ人間は自然の一部であると考えられていた。ところが中世キリスト教の世界になると、聖書の影響や、デカルトやフランシス・ベーコンの影響を受け、自然と人間を分離する二元論が思想の主流となり、自然は人間のために存在するというヒエラルキーが生まれていったのである（深谷・榊田、2006）。

一方日本では、先にも述べたように明治期までは、自然と人間の間には明確な区別はなく、例えば寺田寅彦は『日本人の自然観』（寺田、1948）において、日本人は、人と自然は合わせて一つの有機体であるという自然観を有していると記している。西洋の自然観が、どちらか言うと人間中心主義的なものであるのに対して、日本のそれは生命中心主義的な要素が濃く、これまで検討してきたスピリチュアリティの構成概念としての自然は、まさにこの日本的な自然観のなかに見て取れる概念である。そして、本論で扱った星野道夫の自然観も、まさにこの日本の自然観に他ならない。在るがままの自然に寄り添い、自然と自分との間に明確な境界を作らなかった星野の自然観は、「ナヌークの贈りもの」（星野、1996）の次の一文に如実に表されている。

「われわれは、みな、大地の一部。おまえがいのちのために祈ったとき、おまえはナヌークになり、ナヌークは人間になる。」

このような自然観を有したからこそ、星野道夫は、今森光彦（2013）が評するところの、「背景の中にある生命体が、遠からず近からず程よい距離感を持っている」写真、そして「被写体

に対する愛情と敬意に満ちた」写真を撮ることができたのであろう。

#### 4) スピリチュアリティの標準化と多様性

以上概観してきたように、様々な解釈が検討され、その定義が議論されてきたスピリチュアリティであるが、このような標準化への動きを懸念する考えもある。それは、辻内の言う、「医療・健康の名のもとで、人の生（Life= 生命・人生）が管理・支配されようとしている現代社会において、極めて多様性にとんだスピリチュアリティまでも、専門家に委ねてしまっているのだから」という問題提起である（辻内、2005）。標準化の試みは、多様な解釈がなされるこの用語に対して共通認識を得ようという意味では当然の流れであり、医療、看護、心理学などの分野でスピリチュアリティに関する疫学的検討を試みる場合は、それが標準化されていることが前提となる。しかし、辻内の言うように「スピリチュアリティは個人に関する多彩で多様な経験であり、文化の深層につながる感覚で、一つの言葉では表現しきれない深淵」であるとするならば、今後スピリチュアリティは医療や心理分野だけでなく、より多様な立場から分析され、場面に応じてスピリチュアリティの解釈を使い分ける必要性があるだろう。その意味で、本論文で試みる星野道夫の文章からのスピリチュアリティの分析、すなわち文学作品からスピリチュアリティの概念を探る試みは、多様なスピリチュアリティを解釈する上での一助となるのかも知れない。

## 2. スピリチュアリティが求められる時代

現在の日本は、医療や公衆衛生の進歩によって伝染病や乳児死亡率が大幅に減少した結果、世界一の長寿国となった（厚生統計協会、

2003）。しかし一方で世相に目を向けると、青少年犯罪の凶悪化、ニート、引きこもり、3万人を越える自殺者など“心の病”が関連すると思えないような社会問題が多発している。葉梨（1999）は、これらの状況を生み出す背景には、人間の“心の問題”があることを指摘している。つまり、核家族化の進行、ならびに地域や職場における人間同士のコミュニケーション能力の低下から不安や孤独感を招きやすい生活環境が形成されていること、さらに長引く不況を背景として将来に対する漠然とした不安が広がっていることなどが、人々の気持ちにネガティブな影響をもたらしているという指摘である。そして同時にこの現象はPIL研究会（1993）が指摘するように、これまで我々が歩んできた衣食住・蓄財に関わる欲望の充足、すなわち物質的な価値観ばかりが注目された結果として、生活水準は向上し物質的欲求は満たされつつある一方で、人々が生きる意味や目的を見失った結果なのかもしれない。

窪寺（2004）は、このような人間が経験する生きる意味や目的意識の喪失からくる苦痛をスピリチュアルペインとし、この状態からの解放、すなわちスピリチュアルケアの重要性を指摘している。また大石・安川・濁川（2008）も、こうした心の問題の多くはスピリチュアリティの喪失と関連があることを指摘し、スピリチュアルな価値観の醸成が求められているとしている。一方、地球温暖化に象徴される自然環境の悪化は今や世界的な関心事であり、現代社会における環境問題は、解決されるべき最重要課題の一つに違いない。この問題に対し濁川（2009）は、環境問題の改善には個人の価値観の在り方が大きく影響することを指摘し、その上で、スピリチュアルな価値観の涵養が問題解決への糸口になる可能性を指摘している。

このような時代の中、人々の価値観は、全人的QOL（total QOL）の希求（下妻（2001）、つ

まり従来 QOL の要素として考えられてきた身体面、心理面、機能面、社会面のほかに、「生きがい」や「信念」などスピリチュアルな側面も含めた、総合的な生活の質の向上を志向する方向にシフトしつつある。(大石・安川・濁川・飯田, 2007)。すなわち、このような世相の動向は、時代がスピリチュアルな価値観を求めていることの証しと言ってもいいだろう。

では、スピリチュアルな価値観を醸成するには如何なる方法があるのだろうか。スピリチュアリティやスピリチュアルな価値観を涵養するためには、一般的には、宗教や教育などの手段が考えられてきた(大石ら, 2007; 濁川・大石・上田・カール・飯田, 2011)。また近年、森林などの豊かな自然環境に身を置くことで個人のスピリチュアリティが涵養される可能性も示唆されている(今西, 2008; 濁川・遠藤・満石, 2012)。事実濁川は、大学生に対するスピリチュアリティ涵養の教育が、自然環境の中で行われるとき、よりその効果が高いことを見出している(濁川ら:2012)。本論で取り上げる星野道夫は、その生涯の多くの時間をアラスカの大自然の中で過ごしてきた。彼の文章や写真から滲み出るスピリチュアルな感性は、この事実が大きく由来するのかもしれない。

### 3. 星野道夫の足跡

星野道夫は1952年に千葉県市川市に生まれた。小さいころから沢山の本を読み、なかでも冒険記を好んで読んでいた。中学校までは地元の公立校に通い、高校は慶応義塾高校に電車を通った。この頃すでに、彼の中に広大な原野への憧れは芽生えている。電車で揺られている時、そして都会の雑踏の中にいる時も北海道のヒグマのことが頭をかすめ、以下のように記している。

ぼくが東京で暮らしている同じ瞬間に、同じ日本でヒグマが日々を生き、呼吸をしている……確実にこの今、どこかの山で、一頭のヒグマが倒木を乗り越えながら力強く進んでいる……そのことがどうにも不思議でならなかった(星野c, 2003)。

更に海外への憧れも強く抱いており、1968年16歳のときに単身アメリカに渡っている。星野は約40日間、ヒッチハイクやバスを使いながらアメリカやメキシコを旅した。当時の日本は、今のように誰でも簡単に外国へ行けるような時代では無かった。それを考えれば、若干16歳の少年がこのような旅をすることに、彼の並外れた行動力が伺える。その後、慶應義塾大学に進学した星野は、それまでも北の自然へ関心を抱いていたが、「アラスカ」という写真集を手に入れたことをきっかけに、アラスカへの熱がいよいよ抑えられなくなり、1973年21歳のときにアラスカのシシュマレフ村を訪れ3か月間滞在している(星野a, 2003)。翌年の夏、親友を山の遭難死で失った星野は大きなショックを受け、アイデンティティクライシスに陥り一年ほど悩み続けた。そしてある時、「そうだ、好きなことをやっ払いこう」という答えを得、アラスカに再び渡ること、写真を撮ることを決意した。卒業後2年間ほど写真家の助手を勤めた後、星野は1978年再びアラスカへ渡り、アラスカ大学の野生動物管理学部に入学した。大学ではフィールドワークで、早い頃からアラスカの自然の深層部へ入る機会を得ている。

卒業することが目的ではなかった星野は、1982年にアラスカ大学を中退し、写真に専念するようになる。なかでも中学生の頃から憧れていたというクマ(グリズリー)の撮影を進め、1985年に初の写真集『グリズリーアラスカの王者』を出版する。翌1986年34歳のときに同書で、当時動物写真家の登竜門と言われた平凡

社主催のアニメ賞を受賞する。同じく1986年には初のエッセイ集『光と風』を出版する。その後旅を重ねながら、さまざまな連載を執筆し写真集を出版してゆく。1990年には連載『風のような物語』が評価され、第15回木村伊兵衛写真賞を受賞。同じ年にアラスカのフェアバンクスに家を買ひ、アラスカへの定住を決めている。1993年41歳のときに、萩谷直子氏と結婚、翌1994年に長男誕生。その頃から先住民への関心を高め、神話を辿る旅をするようになる。そして1996年43歳の時に取材で訪れていたロシアのカムチャツカ半島でヒグマに襲われて急死した。その死をめぐるさまざまな言説が飛び交ったが、その真相は『星野道夫 永遠のまなざし』（小坂・大山、2006）に詳しい。

#### 4. 星野道夫とスピリチュアリティ

学童期の星野道夫が、既に自然や、その中で暮らす野生動物に強い興味を抱いていたことは述べたが、この頃は特にスピリチュアリティを連想させるような言動をみせたわけでは無く、星野の母八千代氏によれば、将来は新聞記者になりたいと願うごく普通の少年だったようである（星野、2013）。彼が随所に示すその深いスピリチュアルな感性は、アラスカの自然の中で暮らすことで培われたものであろう。特にエスキモーやインディアンなど先住民との深い交流の中で、アニミスティックな生き物に対する接し方、あるいは自然との調和の中で“生かされている”とする彼らの基本的な生活姿勢は、星野道夫のスピリチュアルな思考に大きな影響を及ぼしたと考えられる。代表的な事例としては、アサバスカン・インディアン最後のシャーマンであるキャサリン・アトラスとの川旅や、その後彼女と共に参加した村の長老の「御霊送りの祝宴」であるポトラッチの体験、さらにクリンギット・インディアンヒーラーであるボブ・

サムとの旅、またクリンギット・インディアン古老であるエスター・シェイとの交流などが挙げられるが、この他にも星野は多くの先住民や特にその古老たちとの親密な交流をもち、その過程でスピリチュアルな感性を研ぎ澄ませていったのだろう。またそれは、常に死と隣り合わせの生を営んでいるアラスカの野生生物をつぶさに観察することから身についた感性かも知れない。それと同時に、人間の力では抗うことのできないアラスカの熾烈な自然の中での生活は、自ずと人を謙虚にし、その思想や発想にも影響を及ぼしていったものと思われる。このような過程を経て、やがて星野道夫は「神話の時代に生きた人々と同じ視線」をもってみたいと願うようになり、同時に「目に見えないものに価値を置くことができる社会」に強く惹かれるようになる（湯川、2003）。そして、1994年に行われた講演「南東アラスカとザトウクジラ」の中では、次のように話している。

『今はもう宇宙に行ける時代だし、自然科学というものが非常に発達して、僕たちがいったいどういう生き物であるのか、何であるのか、少しずつ解明されてきていると思います。しかし、そういった科学の知恵が、なぜか自分たちと社会との繋がりを語ってくれない気がするんです。どんどん自分の事が世界と切り離されて、対象化されてゆくような気がする。月に行けるようになったり、自然科学が発達してきても、自分たちの精神的な豊かさが無くなってゆくような気がして仕方ありません。つまりもしかしたら、自分たちを世界の中で位置づけるために僕たちは、どこかで神話の力を必要としているのではないかと、僕は今思っています。』（星野f、2003）

そして実際に星野は、北米のインディアンやエスキモーが共通して持つワタリガラスの神話に興味を抱き、神話のルーツを求める旅を始めることになる。それは、湯川が指摘するように、

「私たちの文明社会が、安らぎと自信をもたらしてくれる物語をすでに失っている」現状を憂慮した星野が、「あらゆる自然にたましいを吹き込み、もう一度私たちの物語を取り戻そう」と試みる旅だった。(湯川：失われた物語を求めて：星野道夫集4巻解説) このように、星野道夫はアラスカの大自然の中で生きることや、そこで暮らす人々との交流の中から自身のスピリチュアリティを育てていった。

星野道夫の著作は、写真集、エッセイを合わせて20点以上にのぼる。決して多いとは言えないが、写真家・作家としての活動期間が15年程度であったことや、作品を産み出すためのベースがアラスカの野外フィールドであり、キャンプに多大な時間を費やしたことを考えれば、それは旺盛な執筆活動の足跡として見る事ができる。映画監督龍村仁は、「地球交響曲」という映画を通じ、スピリチュアルな目覚めが現代人に必要であると訴える。その映画のコンセプトは「母なる星地球(ガイア)」は、それ自体が一つの大きな生命体であり、我々人類は、その大きな生命体的一部分として、他の全ての生命体と共に、今、ここに生かされている」(龍村、1997) というものであるが、「地球交響曲第3番」は星野道夫の足跡を通じスピリチュアルなメッセージを紡ぎ出したものであった。それは生前の星野の行動、そして残された写真や文章に、スピリチュアルな問いかけが滲み出るからに他ならない。

比較詩学を専門とする菅啓次郎は、星野道夫の作品を評して「この人は、一種の死後の視線、墓の彼方からの視線を持って人間の世界を見ることができた」としている。それは、星野がアメリカ・インディアンのいう「七世代の掟」、つまり七世代後の時代を考慮して現代の行動規範を決定したような、悠久の時間感覚を身に付けていたという評価である。そして、星野の文章と写真は、「神話」を媒介として結合してい

ると捉える。それは、神話の思考を作り上げている特殊な空間で写真を撮り、神話の語られているのと同じ空間で現代の散文を書くという星野道夫の手法を評しての考察であった(菅、2003)。

宗教人類学を専門とする中沢新一は、星野道夫の写真の評して、「こちら側のハンターとして動物を見ていない。普通の動物写真家みたいに、動物をショットして、そのまま帰って来たりしない。ちゃんと自分の行為を償うために、動物たちとの関係を幻想の中でも保ち続けようとして、神話の世界に送り返す「イヨマンテ」までやろうとしていた。」としている(中沢、2003)。

さらにエッセイストである湯川豊は、星野道夫がくりひろげた物語を、一口で言えば、彼が惹かれたのは「目に見えないものに価値を置くことができる世界」であり、その世界を体現している。つまり、今なお神話の世界を心身の内に持っている人々と同じ視線でアラスカの大地を見ようとしたのだった、と評している(湯川、2003)。

星野道夫は亡くなるまでの最後の数年間、多くの北米先住民族が共通して持つワタリガラスにまつわる神話のルーツを求めて旅を続けた。それは現代社会の核となるものを探す旅、つまり、神話の中に現代が必要とする何かを見出そうとする旅だった(星野、2003a)。作家の柳田邦男は、星野道夫のこの旅を「先住民の古老の言葉をヴィヴィッドにとらえ、現代の意味を問い詰める仕事」と評している(柳田、2003)。

作家の寮美千子は星野道夫を評し、その晩年には「心＝神話的視点」の車輪に重きを置き過ぎ、「現実＝科学的視点」という車輪をおろそかにしてしまったのではないかと多少批判的に捉えている。その上で、星野が示した「魂の世界」を取戻し、現実をより豊かにするためにこそ、我々は、目に見えるものと見えないもの、



現実的解釈と神話的解釈、矛盾するこの両方を受け入れる心の強さを持たなければならないと記している（寮、2003）。寮のこの指摘は、至極妥当なものである。経済的価値が重要視され、理想と現実の狭間に多くの矛盾を抱える実社会で生きている以上、「目に見えないものに価値を置く」ことだけで生きるのは無理であり、それは同時に要らぬ摩擦を産み出す元となる可能性がある。しかし星野道夫が、必ずしも「現実＝科学的視点」をおろそかにしたとも思われない。星野は、無垢の北極圏の自然が、「観光資源」や「石油資源」として捉えられた現実もきちんと見据えながら、それを声高に批判することなく、写真や文章を通じて貴重な手つかずの自然の存在の重要性を示唆してきたのである。ただ星野の用いた方法は、寮の言うところの「心の物語」を語るという手法であった。そして、その方法は現実の理屈を語って矛盾を指摘するよりも、時に有効に働くとされるのである。

これら多くの評論に示されるように、星野道夫の仕事は色濃くスピリチュアリティに彩られたものだった。

星野道夫（1996）は、「ナヌークの贈りもの」という美しい絵本の中に、次のような一文を残している。

「われわれは、みな、大地の一部。おまえがいのちのために祈ったとき、おまえはナヌークになり、ナヌークは人間になる。いつの日か、わたしたちは、氷の世界で出会うだろう。そのとき、おまえがいのちを落としても、わたしがいのちを落としても、どちらでもよいのだ。」

ナヌークというのは、イヌイットの言葉で白熊を意味する。この神話の世界を映したような絵本が出版された半年後、星野はロシアのカムチャッカでヒグマに襲われ命を落とした。まるで、自分の死までをも予言するような物語である。

星野道夫が他界して、20年近い歳月が流れるようとしている。しかし現在でも毎年のように

彼の写真展や、関連する講演会などのイベントが開かれ続けている。因みに比較的最近の事例を挙げれば、1998年から2000年の間に朝日新聞社主催の『星野道夫の世界展』が開催され述べ43万6535人が、200年から2005年にかけても同じく朝日新聞社主催の『星野道夫の宇宙展』が開催され述べ46万6157人が、そして2006年から2008年にかけてNHK主催の『星のような物語展』が開催され述べ32万6784人が会場を訪れている（星野道夫事務所調べ）。その他にも地域の図書館や市民団体による数多くの写真展やイベントが毎年開催され、2013年だけでも5回にわたる展覧会が開かれている。また星野道夫の文章は、教材として多くの教科書に採用され日本の学童に親しまれてきた。小学生を対象とした「森へ」（光村図書：小学校6年：国語）、中学生を対象とした「アラスカとの出会い」（学校図書株式会社：中学国語）、高校生を対象とした「もうひとつの時間」（旺文社：高等学校 国語総合）、「十六歳のとき」（明治書院：高等学校 新編現代文）、「アリューション、老兵の夢と闇」（桐原書店 高等学校 展開国語総合）などはその一例である。そして、いまだに彼の業績を編集した新たな著作『悠久の時を旅する：クレビス：2013年』が出版され続けている。このような状況は、正に時代が星野道夫的な何かを求めているからであろうし、時代がスピリチュアルな価値観を求めていることを示唆するものであろう。

## 5. 目的：星野道夫から読み解く日本人が志向するスピリチュアリティの一形態

先にも述べたように、これまでスピリチュアリティの概念構造の分析や、その定義づけは多くの研究者によって試みられてきた（中嶋、2001；田崎ら、2001；葛西、2003；中村、2005；安藤、2007；西平、2007）。竹田・太湯（2006）

は、日本におけるそれらの研究を概観し、その現状と課題を次のように整理している。すなわち、①スピリチュアリティの概念が曖昧なまま研究が行われていること、そしてスピリチュアリティは、②多様性を持つ概念であること、③人間存在の根源性に関わる概念であること、④普段は潜在化しているが、人生の危機に直面した時に顕在化し機能するものであること、⑤宗教的な因子が含まれるが、宗教とは区別されるものであること、⑥「自己」「他者や環境」「自分の力を越える大きなもの」との関係性を有し、これらの関係性を基盤として、「生きる目的・意味」「死や苦しみの意味」について探求するものであること、⑦QOLと深い関係を持つ概念であること、⑧年齢によって異なる様相をもつこと、などである。そして、スピリチュアリティは、その特徴として多様性と共通性を併せ持つ概念であることから、スピリチュアリティ概念についての議論は、その共通性を核にしながらも、多様性という幅を含めて論じていく必要性があり、質的研究や精度の高い測定尺度の開発を通して、日本人のスピリチュアリティ概念を明確化することが今後の課題であるとしている。

竹田ら(2006)の指摘にあるように、その共通性を核としながら、スピリチュアリティ概念の多様性を論ずることは重要な課題である。本研究は、スピリチュアルな生き方を体現し、それを写真や文章を通じて表現したと考えられる星野道夫の作品から、彼が示したスピリチュアリティの概念構造(スピリチュアリティ観)を質的研究から明らかにしようという試みである。これまで、心理学や医療、看護分野などからのアプローチが多かったこの種の試みであるが、これまであまり例をみない文学作品からのアプローチはスピリチュアリティの多様性を考えるうえでの一助になるものと思われる。また同時に、星野道夫の生きた背景を考えれば、これは

「自然を通して観た」スピリチュアリティの分析と言えるかも知れない。これまでに論じたように、スピリチュアリティは自然と深く結びつく概念である。従って、自然を通して観たスピリチュアリティの分析も、この種の研究における重要なアプローチの一つと言えるだろう。

さらに星野道夫が現在でも多くの日本人の共感を得ていることを考えれば、それは同時に日本人が好むスピリチュアリティ観がある程度反映するものかも知れない。従ってこの試みは、日本人が志向するスピリチュアリティの一形態を探る資料となるものと考えられる。

## 6. 研究方法

星野道夫の遺した全文章を網羅したとされる「星野道夫著作集全5巻:新潮社」(星野 a,b,c,d,e, 2003)から、その表現がスピリチュアルな部分、あるいは文脈からスピリチュアリティに色濃く関わると思われる部分を抽出した。このプロセスは、3人の研究者で星野道夫の全ての文章を熟読し、慎重に確認しながら行われた。

ここで抽出された文章をKJ法により分析し、星野道夫が示したスピリチュアリティの意味や概念構造の分析を試みた。KJ法は、一見まとめようもない複数多様な情報やデータを、個人の思考だけではなく、複数人によって類似性や共通性のあるものごとにカテゴリー化し、これを繰り返すことで新たな意味や構造を理解する方法である(川喜田,1995)。KJ法の特徴を、和・遠藤・大石(2011)は以下のようにまとめている。①データ収集と分析を別々に行う、②分類と集約を通して、分析前には気付かなかったことを創造的につくり出す、③単なるデータの分類ではなく、分類と結合によって全く新しい意味のまとまりを見出していく、④語りの背後にある構造を読み取ることができる、⑤経験や想いがある程度まで一般化できる、⑥カテゴリー

化して見出しをつけることによって、要約、抽象化することができる。

具体的には、ここで抽出された文章をもとに、以下の手順で分析を進めた。

#### ①専門領域の異なる複数の研究者による熟読

まず、対象とされた文章を筆者（心身ウエルネス学）と他の専門領域の2人の共同研究者（スポーツ心理学、社会福祉学）の計3名で熟読した。なおこの3名は、本研究の以前から星野道夫に対する造詣が深く、今回の研究に当たり再度「星野道夫全集全5巻」を熟読した。

#### ②オープンコーディング

次に、この3名によるオープンコーディングの作業では、スピリチュアリティに関与している言葉や、その前後の文脈を意味単位として切片化し、それぞれの意味単位に対して、それらを的確かつ簡潔に説明し得る概念を付与した。

#### ③カテゴリー化

さらに、概念の類似性や差異性に着目しながら意味の類似した概念をまとめ、具体的な内容を示す低次のカテゴリーを生成し、徐々に類似した低次のカテゴリーをまとめて、より抽象的な高次のカテゴリーを生成した。これらのカテゴリー化は、絶えず概念のテキストデータ内における文脈を考慮しながら、高次のカテゴリーが新たに生成されなくなるまで繰り返された。本研究では、最終的に最も抽象度が高い高次カテゴリーをカテゴリーとし、その下位に位置する低次のカテゴリーをサブカテゴリー、さらにサブカテゴリーを構成する最も具体性の高い項目を概念とした。なお、これらの一連の分析過程では、スピリチュアリティに関する先行研究における既存の仮説や概念枠組みにとらわれず、書かれているテキストデータから分かることだけを生成するように細心の注意を払った。

#### ④妥当性・信頼性の確保

質的研究では妥当性や信頼性を客観的に評価することが難しいため（瀬島、2005）、研究方

法や結果が研究対象のリアリティをどの程度反映しているかを示し、確実性を確保する必要がある（村山・田中・関矢、2009）。そこで本研究では、解釈の信頼性と妥当性を確保するため、前述の3人の研究者の視点を輻輳化し、異なる研究者間の解釈が収束する点を検索するトライアングレーション（Triangulation）を実施した。そして、意味単位と概念の整合性、さらにサブカテゴリーとカテゴリーの内容について3名の解釈が一致するまで議論した。以上のような分析過程を経て、分析対象の持つ新しい意味や構造を調査することが可能となった。

## 7. 結果

### 1) 概念の抽出

「星野道夫著作集全5巻：新潮社」（星野、2003）の中から、スピリチュアリティに深く関わる内容として、324の文章（センテンス）で構成された92箇所の記事のまとまりが選ばれた。これらのデータ文章に対し、KJ法により概念化の作業を試みた。センテンスのローデータを概念化する作業の一例を、以下に記す。なおローデータは〔 〕、概念は「 」に示す。

〔われわれの生活の中で大切な環境のひとつは、人間をとりまく生物の多様性であると僕はつねづね思っている。／かれらの存在は、われわれ自身をほっとさせ、そして何よりも僕たちが何なのかを教えてくれるような気がする。〕というローデータから、「人間をとりまく生物多様性の重要性」、「他者の存在による自己の認識」という2つの概念を抽出した。

〔すべての生命が動き続け、無窮の旅を続けている。一見静止した森も、そして星さえも、同じ場所にはとどまってははいない。／ぼくは、“人間が究極的に知りたいこと”を考えた。一万光年の星のきらめきが問いかけてくる宇宙

の深さ、人間が遠い昔から祈り続けてきた彼岸という世界、どんな未来へ向かい、何の目的を背負わされているのかという人間の存在の意味……そのひとつひとつがどこかでつながっているような気がした。』というローデータから、「生命がみせる無窮の旅」、「全ての存在の繋がり」という2つの概念を抽出した。

〔夜の世界は、いやおうなしに人間を謙虚にさせる。さまざまな生きもの、一本の木、森、そして風さえも魂をもって存在し、人間を見すえている。〕というローデータから、「人間を謙虚にする万物の魂」という概念を抽出した。

以上のようなプロセスを全てのセンテンスに施し、センテンスが意味する内容の概念化を試みた。さらに、ここで得られた概念の意味の重複などを慎重に考慮し、結果的に133の概念が抽出された。

## 2) サブカテゴリーの生成

ここで得られた133の概念から、類似性のある概念を集め、サブカテゴリーの生成を試みた。その結果、以下に示す22のサブカテゴリーが生成された。その過程を以下に記す。なお概念は「 」内に、サブカテゴリーは『 』内に記した。

「近代社会が忘れていった他者の犠牲の上に成り立つ生命」、「他者の存在による自己の認識」、「その土地に生きる他者との融合」などの概念は、他者の存在の重要性を示唆していることから『他者の尊重』というサブカテゴリーにまとめた。

「多様な価値観の重要性」、「異なる存在を認めることの重要性」などの概念は、多様な存在の共存の重要性を意味することから、『多様な存在の重要性』というサブカテゴリーにまとめた。

「あらゆる生命の目に見えない糸でのつながり」、「森の中の全ての存在が結ばれる一つの生命体」、「人間と万物との繋がり」などの概念は、

万物の繋がりを意味すると考えて、『全ての存在の繋がり』というサブカテゴリーにまとめた。

「オーロラの発見と友人の娘の誕生という同時性」、「人との出会いにみられる意味を持つ偶然」、「運命の不思議」などの概念は、偶然に思えるような出来事も本来意味を持っていることを示唆することから『意味を持つ偶然』というサブカテゴリーにまとめた。

「木々にみられる毅然とした自然の秩序の存在」、「意思をもち旅をする森」、「ムナログがみせる優しさを秘めた自然の秩序」などの概念は、自然界に起こる現象が偶然ではないことを示していると考え、『意志を持つ自然』というサブカテゴリーにまとめた。

「自然との約束を守ることによって得られる運」、「自然の中で認識する自己の存在」、「自然から物語を聞くことのできる感性」などの概念は、自然の中で、それと共存することの重要性を意味することから、『自然との共存』というサブカテゴリーにまとめた。

「圧倒される自然の光景への畏怖」、「本能的な自然への畏怖」、「自然との約束」などのカテゴリーは、自然を畏怖すべき存在として捉えていることから、『自然への畏怖』というサブカテゴリーにまとめた。

「人間を見据えている万物に宿る魂」、「万物に生命が宿るとするエスキモーの考え」、「アニミズムとしての自然」などのカテゴリーは、万物に魂や生命が宿るという思考であることから『アニミズムの認識』というサブカテゴリーにまとめた。

「いつか聞いたインディアン神話」、「神話による宇宙の認識」、「生きる知恵としての神話」などの概念は、神話が人間に何かを示唆しているという考えから『人に道を示す神話』というサブカテゴリーにまとめた。

「インディアンの古い言葉」、「消えゆく古い価値観の保持」、「万物が持つイヌアは人間の姿を

しているというエスキモーの信仰」などの概念は、古い伝承の重要性を示唆していることから『昔からの言い伝えの継承』というサブカテゴリーにまとめた。

「生活の中に存在するタブー」、「不運から自分たちを守る唯一の方法としてのタブー」、「あらゆることを教えてくれる森を守ることの重要性」などの概念は、生活の中に存在するタブーの重要性を示唆していることから『タブーの認識』というサブカテゴリーにまとめた。

「狩猟民の生命への鎮魂と再生の祈り」、「いのちのために祈ることで生まれる大いなる受動性」、「狩猟の運を保つために行われる儀式」などの概念は、古くからある儀式の重要性を示唆していることから『儀式の伝承』というサブカテゴリーにまとめた。

「我われと世界とのつながりを語らない科学の知」、「運命を司るシャーマン」、「人を精神的な豊かさから遠ざける科学の知」などの概念は、科学の知が絶対的なものではないことを示唆していることから『万能ではない科学の知』というサブカテゴリーにまとめた。

「悠久の時間が創り出す水の輪廻」、「星も含めた全ての生命がもつ無窮の旅」、「トウヒが示す旅の終わり新たな旅の始まり」などの概念は、万物は終わりのない旅を続けていることを示唆していることから『無窮の旅』というサブカテゴリーにまとめた。

「次世代への移譲がプログラムされた自然の摂理」、「他者の死を糧としての再生」、「次世代を支える死者のような養木」などの概念は、やがては自分の存在も次世代の糧となることを示唆することから『次世代への移譲』というサブカテゴリーにまとめた。

「死がもたらす再生」、「すべての生命における死と再生」、「自然の終わりは何かの始まり」などの概念は、全ての存在は死と再生を繰り返すことを示唆することから『死と再生』というサ

ブカテゴリーにまとめた。

「エスキモーの示す古老への敬意」、「老人との約束の実行」、「古老が持つ時間を超越した不思議な空気」などの概念は、老人への敬愛の情を示すことから『老いへの寄り添い』というサブカテゴリーにまとめた。

「村の守り神の古老」、「老人との世界観の共有」、「インディアンの古老から物語を聴きたい」という欲求」などの概念は、年長者からの知恵の伝承の重要性を示唆することから『年長者からの伝承』というサブカテゴリーにまとめた。

「誰にも訪れる老いの受容」、「老人と一緒に過ごす静かで優しい時間」、「老人と過ごす不思議で温かいクリスマスイブ」などの概念は、老いること自体、あるいは老いた存在の受容を示唆していることから『老いの受容』というサブカテゴリーにまとめた。

「多くのことを語りかけてくる見えない存在」、「目に見えないことの持つ深い意味」、「目に見えないものに価値を置く社会への郷愁」などの概念は、目に見えない存在の価値を示唆していることから『目に見えない存在の重要性』というサブカテゴリーにまとめた。

「神の視点からの観察」、「人間を謙虚にする万物の魂」、「目に見えない世界に存在する人知を超えた力」などの概念は、人間を超えた存在を示唆していることから『超越的な存在』というサブカテゴリーにまとめた。

「最後に意味を持つのは結果ではなく過ごしたかけがえのない時間」、「過去のプロセスを懐かしさへと浄化する歳月」、「結果を気に留めない無限の解放感と自律」などの概念は、結果よりもそれに至るプロセスの価値を示唆していることから『結果に現れないプロセスの重要性』というサブカテゴリーにまとめた。

### 3) カテゴリーの生成

最後に上に記した22のサブカテゴリーから、

その類似性や関係性を考察し、星野道夫の示したスピリチュアリティを構成するカテゴリーの生成を試みた。その結果、以下に示す6つのカテゴリーが生成された。その過程を以下に記す。なおサブカテゴリーは『 』内に、カテゴリーは【 】内に記した。

『他者の尊重』、『多様な存在の重要性』、『全ての存在の繋がり』、『意味を持つ偶然』の4つのサブカテゴリーは、自分以外の存在を認め、他者が存在することで自分が生かされていることを認識しつつ、自分と全ての他者が意味を持って結びついていることを示唆するものである。従って、これらのサブカテゴリーを統合し【万物の繋がり（ワンネス）】というカテゴリーを生成した。

『意志を持つ自然』、『自然との共存』、『自然への畏怖』、『アニミズムの認識』の4つのカテゴリーは、いずれも生命中心主義的な思考から自然を敬意の眼差しで認め、それとの調和した共存を示唆するものである。従って、これらのサブカテゴリーを統合し、【自然との調和】というカテゴリーを生成した。

『人に道を示す神話』、『昔からの言い伝えの継承』、『タブーの認識』、『儀式の伝承』、『万能ではない科学の知』の5つのサブカテゴリーは、現代社会が絶対視しがちな科学の知に疑問を呈しつつ、古くからの神話や言い伝え、儀式やタブーの存在の重要性を示唆するものである。従って、これらのサブカテゴリーを統合し、【古い知恵の継承】というカテゴリーを生成した。

表1. 生成されたカテゴリー

カテゴリー	サブカテゴリー	概念
万物の繋がり（ワンネス）	他者の尊重	「他者の存在による自己の認識」など
	多様な存在の重要性	「異なる存在を認めることの重要性」など
	全ての存在の繋がり	「人間と万物との繋がり」など
	意味を持つ偶然	「運命の不思議」など
自然との調和	意志を持つ自然	「意思をもち旅をする森」など
	自然との共存	「自然の中で認識する自己の存在」など
	自然への畏怖	「圧倒される自然の光景への畏怖」など
	アニミズムの認識	「人間を見据えている万物に宿る魂」など
古い知恵の継承	人に道を示す神話	「生きる知恵としての神話」など
	昔からの言い伝えの継承	「消えゆく古い価値観の保持」など
	タブーの認識	「生活の中に存在するタブー」など
	儀式の伝承	「狩猟の運を保つために行われる儀式」など
	万能ではない科学の知	「人を精神的な豊かさから遠ざける科学の知」など
輪廻	無窮の旅	「星も含めた全ての生命がもつ無窮の旅」など
	次世代への移譲	「次世代を支える死者のような養木」など
	死と再生	「死がもたらす再生」など
年長者への敬意	老いへの寄り添い	「エスキモーの示す古老への敬意」など
	年長者からの伝承	「老人との世界観の共有」など
	老いの受容	「誰にも訪れる老いの受容」など
目に見えない存在の価値	目に見えない存在の重要性	「多くのことを語りかけてくる見えない存在」など
	超越的な存在	「神の視点からの観察」など
	結果に現れないプロセスの重要性	「最後に意味を持つのは結果ではなく過ごしたかけがえない時間」など

『無窮の旅』、『次世代への移譲』、『死と再生』の3つのサブカテゴリーからは、自分自身の存在を次世代との関係の中で捉え、自分の存在を次世代の存在へと譲りつつ、自分自身は死から再生への無窮の旅を繰り返すことの示唆が読み取れる。従って、これらのサブカテゴリーを統合して、【輪廻】というカテゴリーを生成した。

『老いへの寄り添い』、『年長者からの伝承』、『老いの受容』の3つのサブカテゴリーは、いずれも尊敬の眼差しで年長者に寄り添い、その存在を受容するとともに、そこから何かを学ぼうとする意志を示唆するものである。従って、これらのサブカテゴリーを統合して、【年長者への敬意】というカテゴリーを生成した。

『目に見えない存在の重要性』、『超越的な存在』、『結果に現れないプロセスの重要性』の3つのサブカテゴリーは、結果として得られた成果や、視覚的に存在する“物質”とは別の次元に目には見えないが非常に重要な存在があることを示唆するものである。従って、これらのサブカテゴリーを統合して、【目に見えない存在の価値】というカテゴリーを生成した。

以上のように、星野道夫の示したスピリチュアリティの枠組みを示すカテゴリーとして、【万物の繋がり（ワンネス）】、【自然との調和】、【古い知恵の継承】、【輪廻】、【年長者への敬意】、【目に見えない存在の価値】という6つの項目が導き出された。以上のプロセスを表1にまとめた。

## 8. 考察

これまで、日本人のもつスピリチュアリティの概念構造を分析した研究は、インタビューを基本とした質的研究（田崎ら、2001）、複数のスピリチュアリティに関する文献を対象とした質的研究（竹田ら：2006）、質問紙による因子分析をベースにした研究（上田、2006；中村・長瀬、2004）など色々なアプローチが試みられてきた。

本研究は、星野道夫というスピリチュアルな生き方を体現したと考えられる作家の文学作品を対象に、KJ法を用いた質的研究によるアプローチから、日本人の求めるスピリチュアリティ観を探ろうとする新たな試みであった。分析の結果、星野道夫の示すスピリチュアリティの概念枠組みとして、【万物の繋がり（ワンネス）】、【自然との調和】、【古い知恵の継承】、【輪廻】、【年長者への敬意】、【目に見えない存在の価値】という6つの項目が見出された。（次ページ 図1）

既に述べてきたように、これまでに日本人の持つスピリチュアリティ概念構造の分析は多数行われてきた。それらの内のいくつかを概観し、それらとの対比から、本研究結果の特徴を見てみたい。

まず、WHOの健康概念改訂の動きに応じた国際比較調査の一環として、日本におけるスピリチュアリティ観の検討を行った田崎ら（2001）は、日本人のスピリチュアリティ観には個人差が存在することを前提としたうえで、その構成要素として①自然との対比における人の小ささ、②自然への畏敬の念、③祖先との関わり、④個人の内的強さ、⑤特定の宗教を持たないにしても何か絶対的な力の存在を感じることに5項を挙げている。このうち、「自然への畏敬の念」と「自然との対比における人の小ささ」の2項目は、本研究の【自然との調和】と符合した。また、「特定の宗教を持たないにしても何か絶対的な力の存在を感じることに」は、本研究の【目に見えない存在の価値】に通じるものがあつた。なぜならば、本研究における【目に見えない存在の価値】というカテゴリーには、サブカテゴリーとして『超越的な存在』が含まれたからである。しかし、本研究で見出した【万物の繋がり（ワンネス）】、【古い知恵の継承】、【輪廻】、【年長者への敬意】の4項目に関しては、共通項が見られなかった。

日本人のスピリチュアリティ傾向を評定する

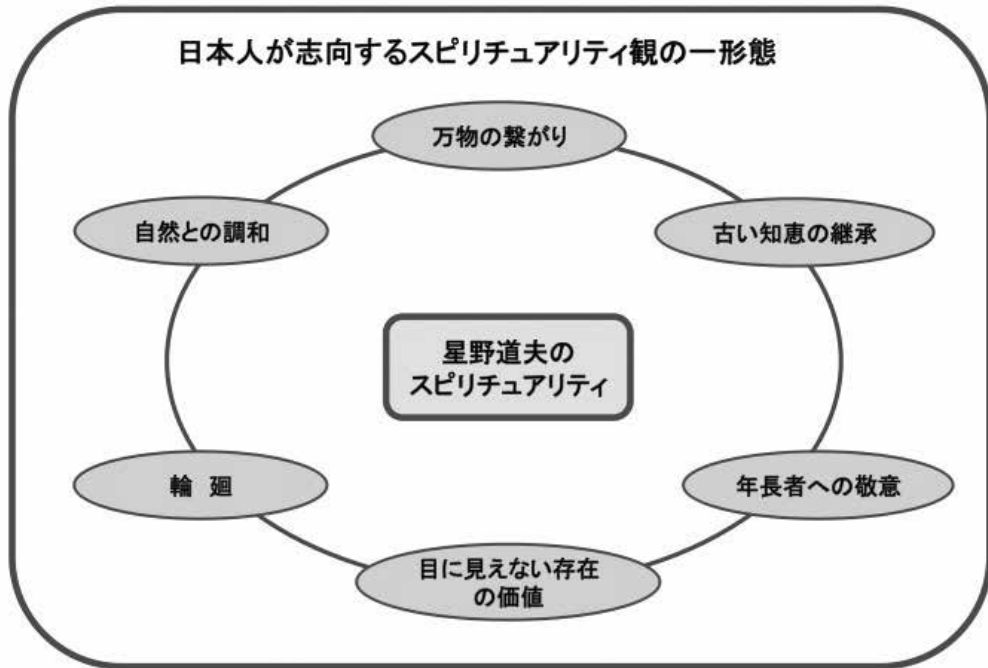


図1. 星野道夫の文章から推察する日本人が志向するスピリチュアリティ観の一形態

改訂版自己超越傾向尺度 (STS) を開発した中村 (1998) は、スピリチュアリティ概念構造を検討し、その中で、スピリチュアリティへの説明力の高い観測変数として①生の意味と目的、②霊性の自覚、③命の永続性、④自然との一体感、の4因子を挙げている。このうち、「命の永続性」、「自然との一体感」の2因子は、本研究の【輪廻】、【自然との調和】と符合した。しかし、本研究で見出した【万物の繋がり (ワンネス)】、【古い知恵の継承】、【年長者への敬意】、【目に見えない存在の価値】の4項目に関しては、共通項が見られなかった。

また竹田・大湯 (2006) は、スピリチュアリティに関する複数の文献を分析対象として高齢者のスピリチュアリティ概念の抽出と構造化を試みている。その結果、日本人高齢者のスピリチュアリティは①生きる意味・目的、②死と死にゆくことへの態度、③自己超越、④他者との

調和、⑤よりどころ、⑥自然との融和、の6つの概念から構成されていることを示している。このうち、「他者との調和」は本研究の【万物の繋がり (ワンネス)】と、そして「自然との融和」は本研究の【自然との調和】と符合するものであった。しかし、本研究で見出した【古い知恵の継承】、【年長者への敬意】、【輪廻】、【目に見えない存在の価値】の4項目に関しては、共通項が見られなかった。

さらに青年層を対象とした研究では、女子大学生を対象としてスピリチュアリティ評定尺度を作成した比嘉 (2002) の研究を挙げることができる。ここでは、スピリチュアリティを構成する因子として①自覚、②意味感、③意欲、④深心、⑤価値観の5項目が見出されている。比嘉の論文から、これらの因子の背景となる意味を検討してみた結果、「深心」の中に、自然と人間の繋がりを意図する意味が含まれ、その点



では本研究の【自然との調和】と関連性が見出せた。しかし、それ以外の5項目に関しては共通点が見られなかった。

以上、田崎や中村の検討した日本人全体のスピリチュアリティ概念構造、そして竹田らの高齢者、さらに比嘉の示した青年層のスピリチュアリティ概念構造と本研究結果を比較した。その結果、本研究で得られた【自然との調和】は、他の研究結果とよく一致した。これは先にも述べてきたように、スピリチュアリティという概念が自然と深く関わることを示唆するものであろう。他に【万物の繋がり（ワンネス）】、【輪廻】の2項目に関しては、それぞれ他の一つ研究の概念と一致した。そして【目に見えない存在の価値】に関しては、田崎の示した概念と一部通じる部分があった。しかし【古い知恵の継承】と【年長者への敬意】の2項目に関しては、ここで検討した他の研究では見出されていない概念であった。見方を変えれば、この2項目は星野道夫が示したスピリチュアリティの特徴と言えるかも知れない。確かに星野道夫の文章には、インディアンの古老や、エスキモーの老婆、あるいは土地の老人などとの交流が非常に多く語られている。そしてその眼差しは常に愛と尊敬の念に満ち溢れ、彼らの思いに共感を抱きながら、古い知恵から何かを学び取ろうという姿勢に貫かれている。（管啓、2003）そして本研究で得られたサブカテゴリーの『万能ではない科学の知』や『人に道を示す神話』に示されるように、エビデンスベースの科学を絶対視する傾向に疑問を示しつつ、神話や古い言い伝えの中に、現代人が学ぶべき多くの知恵があることを示唆している。過去のスピリチュアリティ概念構造の分析は、インタビューによる質的研究やアンケートによる量的研究を用いた対象者自身の分析であり、日本人が自分のものとして持っているスピリチュアリティ概念の分析であった。一方本研究の分析結果は、対象者自

身の分析ではなく、支持されている作家の文章を分析するという手法から導かれたものであった。従ってここで示された結果は、自分のものとして持っているというよりも、自分が志向する概念、理想として求めている概念として捉えることができるかも知れない。年長者や老人への敬意という考えは、現代社会では忘れ去られつつある思考のようにも思える。しかしここで示されたように、我々日本人の心の中には、このような時代だからこそ、星野道夫が示したような敬老の思想を求める気持ちが静かに息づいているのではないだろうか。

星野道夫のスピリチュアリティの特徴として、もう一つ、ほかの研究との関連性が薄かった【目に見えない存在の価値】を挙げることができるだろう。湯川（2003）も指摘するように、星野は「第一級のネイチャー・ライター」であるが、同時に写真家である。星野道夫が明確に意識したかどうかは別として、彼は写真という目に見える媒体を通じ、被写体の奥に潜むスピリチュアルな目に見えない存在を描こうとしたのではないだろうか。事実、星野と同じく動物や自然を被写体としたプロの写真家である今森（2013）は、星野道夫の写真を評して、極北の大地に息づく「生命の循環」という直接目には見えないものを表現したとしている。さらに星野自身も、「目に見えるものに価値を置く社会と、見えないものに価値を置くことができる社会の違いをぼくは思った。そしてたまたま後者の思想に魅かれるのだった。夜の闇の中で、姿の見えぬ生命の気配が、より根源的であるように。」と記している（星野 d、2003）。

本研究で得られた6項目つまり、【万物の繋がり（ワンネス）】、【自然との調和】、【古い知恵の継承】、【輪廻】、【年長者への敬意】、【目に見えない存在の価値】は、星野道夫が生きてきた背景を考えると、先にも述べたように、アラスカの大自然の中で暮らし、先住民との交流

や野生動物との深い関わりの中で無意識のうちに培われたスピリチュアリティ観だと考えられる。もちろんこれは、星野道夫という一人の作家が備えたスピリチュアリティ観を分析した結果に過ぎない。従って、これをもって日本人全体が志向するスピリチュアリティの在り様とまで敷衍することはできない。しかしこれまで見てきたように、日本人のスピリチュアリティ観がアニミスティックな感性や自然と深く関わっていることから、我々は星野道夫のような感性を無意識のうちに求めていたのかも知れない。従ってここで得られた結果は、日本人全体が志向するスピリチュアリティ観とは言えないまでも、それらの中の一形態を示唆するものとして考えて良いのかも知れない。

また同時に、この結果は、文学作品を分析するという新たな手法により導かれたスピリチュアリティ概念構造であった。結果的にここで得られた概念構造は、従来の研究手法による結果と大幅に異なるものではなかったが、【古い知恵の継承】、【年長者への敬意】、【目に見えない存在の価値】などの項目は、従来の研究結果との重複が薄く、この研究で得られたスピリチュアリティ構造の特徴と言えるかも知れない。また、これまで、主として医療、介護、心理学などの立場から分析されてきたスピリチュアリティであったが、一般人が愛読する文学作品からスピリチュアリティを読み解く試みは、スピリチュアリティの多様性を考え、より多様な立場から分析するという意味において、一つの手法を提示できたものと思われる。

ここで得られた項目を総合して星野道夫のスピリチュアリティ観をまとめると、以下のような人間像が浮かび上がる。すなわち、自然との調和を重んじ、年長者や古い知恵に生きるべき方向性を仰ぎながら、物質を超えた目に見えない存在にも価値を見出し、多様性を認めつつも全ての存在が繋がっているというトランスパー

ソナル思想をもち、輪廻という悠久の旅を続ける人間。経済活動が優先され、物質的な価値観が偏重されがちな現代社会において、人々は地球環境の危機的な状況や、その他様々な格差や歪みを否応なく感じている。もちろんここで示された様なスピリチュアルな感性に富んだ人間が、様々な社会矛盾を軽減できるという保証はどこにもない。しかしそのような社会にあって、人々は無意識のうちに、星野道夫が示したようなスピリチュアリティ観に未来の希望を託しているのではないだろうか。

#### 引用文献

- 安藤治 (2007). 現代のスピリチュアリティ —その定義をめぐって— 安藤治、湯浅泰雄 (編) (2007). 『スピリチュアリティの心理学』. セセらぎ出版 (大阪)、11-33.
- Cloninger, C. R., Svrakic, D. M., Przybeck, T. R. (1993). A psychobiological model of temperament and character. *Archives of General Psychiatry*, 50, 975-990.
- Elkins, D. N., Hedstrom, L. J., Leaf, J. A., & Saunders, C. (1988). Toward a humanistic phenomenological spirituality; Definition, description, and measurement. *Journal of Humanistic Psychology*, 28, 5-18.
- 深谷昌弘・榎田晶子 (2006). 『人々の意味世界から読み解く日本人の自然観』. 慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科 (東京)
- 葉梨康弘 (1999). 『少年非行について考える』. 立花書房 (東京)
- 比嘉勇人 (2002). スピリチュアリティ評定尺度の開発とその信頼性・妥当性の検討. *日本看護科学学会誌*, 22(3), 29-38.
- 星野道夫 (1996). 『ナヌークの贈りもの』. 小学館 (東京)
- 星野道夫 a (2003). 『星野道夫著作集 1』. 新潮社 (東京)
- 星野道夫 b (2003). 『星野道夫著作集 2』. 新潮社 (東京)
- 星野道夫 c (2003). 『星野道夫著作集 3』. 新潮社 (東京)
- 星野道夫 d (2003). 『星野道夫著作集 4』. 新潮社 (東京)
- 星野道夫 e (2003). 『星野道夫著作集 5』. 新潮社 (東京)
- 星野道夫 f (2003). 『魔法の言葉—星野道夫講演集』. スイッチ・パブリッシング (東京)
- 星野八千代 (2013). 夢を応援して. 星野道夫『悠久の時を旅する』. クレヴィス (東京)、206-207.
- 今森光彦 (2013). 命を撮るということ. 星野道夫『悠久の時を旅する』. クレヴィス (東京)、204-205.

- 今西二郎 (2008). 緑の環境と統合医療. 日本緑化工学会誌, 33(3), 435-440.
- 磯村健太郎 (2007). 『〈スピリチュアル〉はなぜ流行るのか』. P H P 研究所 (東京)
- 和秀俊・遠藤伸太郎・大石和男 (2011). スポーツ選手の挫折とそこからの立ち直りの過程—男性中高生競技者の質的研究の観点から. 体育学研究, 56, 89-103.
- 葛西賢太 (2003). 「スピリチュアリティ」を使う人々. 湯浅泰雄 (監修) 『スピリチュアリティの現在』. 人文書院 (東京), 123-159.
- 加藤清 (1996). 真の癒しへの黄金の糸. 『癒しの森 心理療法と宗教』. 加藤清 (監修), 創元社 (東京), 187-225.
- 川喜田二郎 (1995). 『発想法創造性開発のために69版』. 中央公論新社 (東京)
- 小坂洋石・大山卓悠 (2006). 『星野道夫 永遠のまなざし』. 山と溪谷社 (東京)
- 厚生統計協会 (2003). 厚生指針. 『国民衛生の動向』
- 窪寺俊之 (2004) 『スピリチュアルケア学序説』 三輪書店 (兵庫)
- 村山孝之・田中美吏・関矢寛史 (2009). 「あがり」の発現機序の質的研究. 体育学研究, 54, 263-247.
- 中嶋宏 (2001). 健康の定義とスピリチュアル・ダイメンション. 『健康と霊性 —WHOの問題提起に答えて—』. 宗教心理出版 (東京), 3-56.
- 中村雅彦 (1998). 自己超越と心理的幸福感に関する研究—自己超越尺度作成の試み—. 愛媛大学教育学部紀要 (教育科学), 45(1), 59-79.
- 中村雅彦・長瀬雅子 (004). 看護師と看護学生のスピリチュアリティ構成概念に関する研究. 日本トランスパーソナル心理学/精神医学会誌, 5(1), 45-51.
- 中村雅彦 (2005). スピリチュアリティ (霊性) 概念の再検討 —市井の人々が語る日本的なスピリチュアリティの定量的、定性的分析のパラダイム— (<http://homepage3.nifty.com/yahoyorodu/rsts.htm>) 2013. 10. 22.
- 中沢新一 (2003). 動物によるテクノロジーのほうへ. ユリイカ詩と批評, 12, 42-59.
- 濁川孝志 (2009). 環境問題とスピリチュアリティ. 立教大学コミュニティ福祉学部紀要, 11, 91-110.
- 濁川孝志・大石和男・上田亜樹子・カール・ベッカー・飯田史彦 (2011). 教育とスピリチュアリティ. 立教大学コミュニティ福祉学部紀要, 13, 181-205.
- 濁川孝志・遠藤伸太郎・満石寿 (2012). 自然環境がスピリチュアルな講義の効果に及ぼす影響—自然がもたらすスピリチュアリティの向上の可能性—. 日本トランスパーソナル心理学/精神医学 12(1), 82-95.
- 西平直 (2007). スピリチュアリティ再考. 安藤治・湯浅泰雄 (編) 『スピリチュアリティの心理学』. せせらぎ出版 (大阪), 71-90.
- 大石和男・安川通雄・濁川孝志・飯田史彦 (2007). 大学生における生きがい感と死生観の関係. 健康心理学研究, 20(2), 1-9.
- 大石和男・安川通雄・濁川孝志 (2008). 死生観に関する教育による生きがい感の向上—飯田史彦による「生きがい論」の応用事例 トランスパーソナル心理学/精神医学, 8, 44-50.
- PIL研究会 (1993). 『生きがい—PILテストつき—』 システムパブリカ (東京) .
- 寮美千子 (2003). 神話になった少年. ユリイカ詩と批評, 12, 118-133.
- 瀬島克之 (2005). 質的研究に問われるもの科学的研究としての背景と課題. 保健の科学, 47, 353-360.
- 下妻晃二郎 (2001). 疾患特異的尺度「がん」池上直己・福原俊一・下妻晃二郎・池田俊也 (編) 『臨床のためのQOL評価ハンドブック』. 医学書院 (東京), 52-61.
- 管啓次郎 (2003). 動物によるテクノロジーのほうへ. ユリイカ詩と批評, 12, 42-59.
- 鈴木大拙 (1972). 『日本の霊性』. 岩波文庫 (東京)
- 竹田恵子・太湯好子 (2006). 日本人高齢者のスピリチュアリティ概念構造の検討. 川崎医療福祉学会誌, 16(1), 53-66.
- 龍村仁 (1997). 地球交響曲第3番に向けて—故 星野道夫に捧ぐ (<http://gaiasympphony.com/gaiasympphony/no03>) 2013. 10. 23
- 田崎美弥子・松田正己・中根允文 (2001). スピリチュアリティに関する質的調査の試み—健康およびQOL概念のからみの中で— 日本医事新報, 4036, 24-32.
- 寺田寅彦 (1948). 『日本人の自然観』. 岩波書店 (東京)
- 辻内琢也 (2005). スピリチュアリティの残照. 湯浅泰雄・春木豊・田中朱美 (編) 『科学とスピリチュアリティの時代』. ビイニング・ネットプレス (東京), 48-56.
- 上田直宏 (2006). 学生のもつスピリチュアルペインの構成概念とその表出. 関西学院大学社会学部紀要, 101, 143-158.
- 柳田邦男 (2003). 複眼の思索者. ユリイカ詩と批評, 12, 60-61.
- 湯浅泰雄 (2005). 科学と霊性の交流時代へ. 湯浅泰雄・春木豊・田中朱美 (編) 『科学とスピリチュアリティの時代』. ビイニング・ネットプレス (東京), 23-44.
- 湯川豊 (2003). 一粒の雨を見よ. ユリイカ詩と批評, 12, 66-81.
- 湯川豊 (2003). 失われた物語を求めて. 星野道夫 『星野道夫集4巻』. 新潮社 (東京), 327-343.

### Abstract

The purpose of this study was to make sense of the Japanese view of spirituality through a study of the literary works of Michio Hoshino. Passages thought to be concerned with spirituality were selected from his writings with the KJ method employed to extract six elements of structural spirituality. This approach was considered to contribute to find out the variety of spirituality. The six extracted elements were: *oneness*, *harmony with nature*, *inheriting wisdom from the past*, *transmigration*, *respect for the elderly*, and *the value of invisible existence*. The results suggested that those elements might be one of the key to understand what Japanese people hope to find in spirituality.

**Key Words :** Michio Hoshino, spirituality, works of literature

### 要約

本研究は、星野道夫の著作から日本人が志向するスピリチュアリティの一形態を探り、同時にスピリチュアリティの多様性について考える試みであった。星野道夫の著作からスピリチュアリティに関連する文章を抽出し、それらの文章を対象にKJ法を用い、星野道夫が描いたスピリチュアリティの概念構造を読み解いた。この手法は、これまでに無い新たなアプローチであり、スピリチュアリティの多様性を示す一助になると考えられた。分析の結果、【万物の繋がり】、【自然との調和】、【古い知恵の継承】、【輪廻】、【年長者への敬意】、【目に見えない存在の価値】の6項目が、星野道夫の示したスピリチュアリティ観の構成因子として生成された。星野道夫が現在でも多くの日本人の支持を得ていることを考えると、これらの内容は日本人が好むスピリチュアリティの一形態かも知れない。同時に、多様性を持つスピリチュアリティ概念構造の一形態と言えるかも知れない。